

「社会知」と暴力経験 —— 第二次大戦末期ドイツ国防軍兵士の野戦郵便から ——

小野寺拓也

私は2010年に提出した博士論文『イデオロギーと「主体性」—第二次大戦末期のドイツ国防軍兵士』において、ベルリン・コミュニケーション博物館所蔵史料を中心に、ドイツ国防軍兵士（具体的には下士官・兵卒の陸軍兵士）が記した五千通以上の手紙の分析を行い、彼らを最後まで戦い続けさせた要因は何であったのかを考察した¹。本報告ではこの分析結果を、本シンポジウムのテーマ「市民社会と暴力」に引きつけて、三つの観点から整理したい。具体的には、(1)「ハードさ Harte」としての「男らしさ」、(2)暴力経験の「固有性」、(3)敵・味方イメージという三点である。なお紙幅の関係から、具体的な手紙の引用は最小限にとどめる。また、タイトルに掲げた「社会知 Soziales Wissen」という概念は、本報告では、兵士たちが軍隊に入る前の社会化の過程で既に「常識」として内面化していた知識、といった程度の意味で用いたい²。

まず(1)「ハードさ」としての「男らしさ」の問題についてであるが、本報告の分析対象である「ふつうの兵士」たちにとって、軍隊という場所はもちろん好きこのんで入った場所ではなかった。「我々の本意ではない人生を強いられているというのは大きな悲劇ですが、いつかまた違う人生が送れるという希望は持っています」³というように将来、民間人としての生活を再開しようという見通しがあつてようやく、軍隊生活は耐えうるものであった。民間人としてのキャリアが中断させられて「本意ではない人生を強いられている」という被害者意識は根強いものがあり、民間人としてのアイデンティティは軍隊に入った後も重要な要因でありつづけた。さきほどの兵士は軍隊に入って三年目となる日を「悲しみの日 Trauertag」と名付け、「その間私はすっかり『古参』兵になりましたが、あいかわらず民間人としてのバックグラウンドとともにありますし、これからもそうありつづけたいと願っています」⁴と記している。そのような彼らにとって、戦闘的・英雄的で、仮借のない暴力の担い手という、プロパガンダが要求する攻撃的な「ハードさ」は、受容するのが困難なイメージであった。

その一方で、絶望的な戦況、戦場における不安や恐怖、兵士としての自分とそれ以前からの自分との葛藤、空襲の危険にさらされている銃後の家族への心配、極度の見通しのきかなさなど、心配事や不安に事欠くことはなかった。そうした中、暇な時間があるとさまざまな陰鬱な考え事に引き込まれ、「軟弱 weich」になってしまうことは少なくなかった。ケルン空襲の報に接したある兵士は、次のように不安を

吐露している。

「一度も手紙が来ません。何も分かりません。私ができるのはただ希望を持つこと、そしてもう一度希望を持つことだけです。状況はほとんど耐え難いものです。二交代シフトで、一日のほとんどが任務と睡眠なこと、くよくよ考える時間がほとんどないことは私にとっては幸運です。（中略）多くの戦友が今日そうであるように、何も考えることなくぶらぶら日を送ることができればいいのに、とよく思います。しかし西部〔戦線〕にあって、今にも爆発しそうな危険なところにいる我々のような人間には、ほんの少しでも責任感があるのなら、それは不可能なのです」⁵。

この手紙にも端的に表れているが、そうした過酷な状況の中でなんとか精神的なバランスを保つために、兵士たちはある種のよろいを身にまとい、その中に自分を閉じ込めておかなければならないと考えるようになる。具体的には、世の中の様々なことについて感覚を麻痺させる、鈍感 *stur* になる、思考を停止させる、あるいは物事を無理矢理ポジティブに考える目的楽観主義 *Zweckoptimismus* といった、様々な防衛機制である。

兵士のなかにはそこからさらに進んで、「兵士としての自己」と「民間人としての自己」とを切り離す解離を行うことによって後者を前者から守ろうとするものもいた。

「本当に大事なものはいったい何なのでしょう。そんなものは、何一つないのです！ただ、人間があらゆる判断基準を失ってしまうことについては心配しています。それは正しいことではありません。我々哀れな人間の群れにとって、大事なことなど何一つないのです！それ〔大事なことなど何一つないということ〕だけが唯一正しい判断基準なのです！だからこそ、意気消沈しても無意味なのであって、人間は『この世』において宇宙空間を彷徨うちっぽけな埃に過ぎず、生きているのも単なる偶然に過ぎないということと折り合わなければならないのです。我々にとってすべては重要ではなく、ちっぽけなもので、偶発的なものなのです！この困難な時期を精神的に傷つくことなく乗り越えるためにはそうした態度が必要だと思えます。自分を局外に置き *Sich außerhalb sich selbst stellen*、嫌々ながらも傍観し、そこから教訓を得る。それが、我々に唯一残されている選択枝なのです」⁶。

この手紙からは強い無常観とともに、「精神的に傷つくことなく乗り越える」ために「自分を局外に置き、嫌々ながらも傍観し、そこから教訓を得る」という、二重化の戦略が明確に読み取れる。しかし心理学で指摘されているように、解離という手法はあくまで一時的な対応としてのみ可能であり、人間は長期の解離に耐えることができない。「それ以前の自分」が「現在の自分」によって影響を受け、変わることでは、一体性が維持できないのである⁷。彼らも、兵士という現在の自分によってそれまでの「民間人としての自己」が徐々に浸蝕されていくという形では、この状況を乗り切ることはできなかった。上記の兵士も様々な戦場経験を経たのちに、

悲惨な境遇の人びとに同情するという感情を失い、血まみれになっている若い兵士を見てももはや何も感じなくなると述べた上で、次のようにも記す。

「かつては戦闘という領域は、私にとって『タブー』でした。とにかくうんざりして、耐え難かったのです。しかしいまではまったく違います。私は自分の新たな保護装甲 Schutzpanzer を見つけたのです。そこからは何も入り込ませないような立ち位置を」⁸。

自分を守るためにまとったはずの保護装甲が次第に自分を乗っ取り、戦闘ももはやタブーではなくなる。こうしてさまざまな防衛規制も、敵に対する無慈悲さ、冷淡さ、無感覚さへと転化していく。結果としては彼らも、暴力の担い手としてナチ・イデオロギーが要求する攻撃的な男性性と何ら遜色ない存在となっていく。

一方で、知識と経験を集積する「ある種の学校」として軍隊を捉え、そこで試練を経ることで人間として「成長」していこうという意欲や、過酷な状況を「試練」として捉え、そこで自分が人間的に成長できるという観念も、特に若い兵士たちをとらえた。しかしそれは、積極的に試練を求めるといよりは、過酷な軍隊生活や払わなければいけない犠牲をどう解釈すれば有意義なものとするのかという、多分に「防衛的」な性格を帯びていた。こうした防衛的な性格をよく表現しているのが、1924年生まれの人びとによる以下の記述である。

「しかしここでは自分の能力を発揮することが出来ず、学びたいことを学ぶことが出来ません。それが兵士生活の一番辛いところです。もっと発展したいというエネルギーはあるのに、外に向かっていくことは封じられているので、我々自身へと向かってきてしまうのです。それが、私が払わなければいけない犠牲なのです。しかし時代はあらゆる人々から多くのこと、ハードなことを要求します。しかし神は刈り入れるだけでなく、種をまく存在でもあります。犠牲によって人間は成長するのです」。

「もし私が本当に―私はそう確信しているのですが― [兵士とは] 違う責務のために生まれたのであれば、神はこの時期を無事にくぐり抜けさせてくださるだろうし、それ [軍隊での経験] を通じて数え切れないほど多くのものを得させてくださるでしょう。それによって精神的により成熟し、いままで私が知らなかったような価値観へと切り開かれるでしょうし、そのことを私は疑っていません」⁹。

自分の能力を発揮できず、学びたいことが学べず、「もっと発展したいというエネルギーはあるのに、外に向かっていくことは封じられているので、我々自身へと向かってきてしまう」環境。しかしそれは「払わなければいけない犠牲」なのだと自分に言い聞かせ、「犠牲によって人間は成長する」という一般論へと回収する。そして、「それによって精神的により成熟し、いままで私が知らなかったような価値観へと切り開かれる」のだと、試練をさらに積極的なものとして捉えるようになる。さらにその半年後には、喜びも悲しみも深く感じる事が、自分にとってかけがえのない財産であって、それによって自分がより豊かになれるのであり、「恐怖に対して

自覚的に立ち向かえば、それを克服でき」るし、来たりくる困難な出来事に対して、より強くなれるとも記している¹⁰。

こうした「試練」という考え方は、宗教的な「受苦」のイメージと結びつくこともあった。あるカトリックの兵士は大戦末期に、「[苦しみを]ともに耐えることを我々は求められているのではないのでしょうか？耐えるだけで十分なのではないのでしょうか？私は苦しみを必要としているのだと思います」と、苦しみに積極的な意味を与えようとする。「間違いなく神は、人間を試すために、今日悪魔に夜を与えたもうたのです」¹¹と、悲惨な現状が、神による試練として読み替えられる。こうした考え方は信仰心という、兵士となる前に既に内面化していた「社会知」に根付いているものであるからこそ、攻撃的な「ハードさ」よりも兵士たちによって領有しやすいものであった。

このように、兵士たちにとって「ハードさ」とは必要に迫られて被らざるを得ない仮面のようなものであり、基本的に防衛的なものであったと言えるが、しかしそれまでの彼らの民間人としてのアイデンティティや宗教的観念という、軍隊に入る前からの「社会知」と密接に結びついたものであるからこそ、彼らの中でしっかりと根を張り、強い説得力をもっていた。そして、たとえ防衛的なものではあっても「ハードさ」が内面化され、暴力に対して無感覚になっていくという意味では、第二次大戦末期の絶望的な状況においても、攻撃的な「ハードさ」と機能においては何ら遜色ない役割を果たしていくことになる。

今まで見てきたように、暴力には主体を徐々に浸蝕していくという側面がある。不安や恐怖という心理構造を前にして「ハードさ」という保護装甲を身にまとうというのは主体の側の選択だが、そうした「ハードさ」を一旦身にまとうと、主体の側がたとえそれを嫌悪していても、あるいは部分的には抵抗感を覚えていたとしても、徐々にそれまでの自分を変質させ、暴力に徐々に無感覚になっていく。従って次に考える必要があるのが、(2)暴力経験の「固有性」という問題である。

「私は今、短時間ではあっても戦争をこの目で見ました。もう十分です。残忍なものです。『そこにいたことがある人 Dringeleger』でなければまったくわからないでしょう。ここ数日私は主に航空機と対峙してきたのですが、もううんざりです。この感覚。爆弾が投下される様子を目の当たりにする。爆弾を見る。ちっげな点々が降ってきて、直接自分の上へとやってくる。縮こまりながら轟音を立てて過ぎ去っていく音を聞く。もう何も考えられない。思考の停止した空間。そして爆裂音と地面の震動。すさまじい雷鳴。泥と埃が顔に飛び散る。そして死の静謐さ。そう見える。航空機は陣地に対して集中砲火を浴びせ、高射砲は狂ったように音を立てているにもかかわらず。爆弾が落ちてくる。まだ生きている。傷も負っていない。他のすべてのことは遮断されている。そして再び徐々に。手探り状態で気を取り戻す。何が起こったんだ。何が起きたんだ？」

大戦末期に初めて前線に投入されたこの兵士のたどたどしい、しかし綿密な報告

には、戦時暴力に晒された兵士の心理状況とともに、感覚を容赦なく麻痺させる暴力固有のダイナミクスが如実に表れている。この戦闘で自分の隣にいた戦友を亡くした彼は、神経が参ってしまったことを、正直に家族に書き送っている。

「大量の爆弾が投下され、体が振動したときにどんな気分になるかは、筆舌に尽くしがたいものがあります。投下の様子ははっきりと見えます。自分の上へと降ってくるのが。私はこの日は道徳的にも精神的にも肉体的にも、完全に参ってしまいました。眠りにつくこともできませんでした。戦友の絵が脳裏から離れなかったのです。突然人生からいなくなってしまった戦友の。これが私の初めての戦闘投入の日でした」¹²。

そして兵士たちを苦しめたのは、前線における暴力だけではない。銃後にいる自分の家族が空襲を受けるのではないかとという恐怖、家族を自分の手で守ることができないという無力感は彼らを大いに苦しめた。また、「私も去年、避難民の悲惨さを十分すぎるほど目の当たりにしてきました。年老いて衰えた人々や、子どもを抱えた若い女性が彷徨い、必要最低限のものしか持ち歩けない様を見ることが、どんなに悲しいことでしょう。君たちにも本当にこの命運が割り当てられなければならないのでしょうか。そんなことは考えられません。ただ泣きわめくしかありません」¹³というように、前線地域における避難民たちの苦しみを目の当たりにして、その悲惨な境遇が自分の家族をも襲うのではないかと不安に駆られた。さらに占領地域において略奪や放火などを行い粗暴化していたドイツ軍が、ドイツ本国においてもドイツ人に対して暴力行為を働くのではないかと怖れていた。ある兵士は、ドイツ西部に休暇で帰った兵士から聞いた情報として、「前線にいるある兵士の家がドイツ兵によってこじ開けられ、住居が徹底的に荒らされたそうです。敵地から戻ってきた多くのドイツ兵が慣れっこになっているように。腹が立ちませんか。ドイツ兵がそのようなことをすることがあり得るなどと、誰が思ったのでしょうか。将来的には、厳しい規則ができればいいのですが。長い戦争が多くの人間にもたらした墮落ぶりが見て取れます」¹⁴と記している。こうして前線と銃後での暴力経験が複雑に絡みあい、兵士たちにとって大きな精神的負担となった。これらの直接・間接的な暴力経験を通じて、多くの兵士は感覚を麻痺させ、思考を停止させ、無力感にうちひしがれることになる。

さらに暴力経験の固有性として挙げられるのが、言語にして客観化するということが極めて困難であるという点である。言語化しがたい経験が澱のように沈殿し、トラウマとなって後々まで兵士を苦しめることになる。一兵士として従軍していたのちのノーベル賞作家ハインリヒ・ベルは、ハンガリー東部のヤシーJassyで負傷したのち、そのトラウマ経験、過酷な戦闘の記憶がいつでも自分を乗っ取りかねないという恐怖を次のように記している。

「ヤシーでの日々についての恐ろしい記憶から直接の衝撃は失われ、非常に精神的な負担になるということもはやなくなりました。ああ、私が負傷してからよう

やく十日経ったのです。しかし私には、あそこにとときから長く長く、長い時間が経ったような気がします。この筆舌に尽くしがたい戦争の残酷さはあまりにも容赦ないものだったので、あの日々については一秒たりとも忘れることはできませんし、また忘れたとは思いません。それでも圧倒するような、ぞっとするような暴力 *Gewalt* は、そこから取り除かれてほしいとは思いますが。暴力は重苦しく陰鬱で、悪夢のようなものでした。君も知っているように、戦争へのこうした記憶すべてが私にとっては貴重なものなのですが、できることなら私がそうした記憶をコントロールし、記憶によって私がコントロールされることがなければよいのですが¹⁵。

そしてその四ヶ月後にもベルは、「機関銃がぞっとするほどけたたましく静寂をつんざき、航空機の機関銃が意地の悪い低いなり声をあげる。ああ、私の心臓の鼓動は荒々しく高まっています。というのも、前線のあらゆる恐怖が、百万分の一秒にいたるまで私の中で生き生きとよみがえってくるからなのです」と暴力経験がフラッシュバックのように鮮明によみがえってくる様子を、妻へと書き送っている¹⁶。

これに、極度の見通しのきかなさが付け加わる。戦争の帰趨も自分の命運も見通せないという状況は、それ自体が苦痛であった。「私は本当に何も言えないし、風は我々をどこに向かって押し流すつもりなのか誰にも分かりません¹⁷」という記述が示しているように、予測が不可能であるということは、自分で自分の人生をコントロールできないということ、主体性を奪われているということの意味していた。「戦争によって、将来に関するあらゆる計画的な思考が妨げられています。鎖につながれた犬のように生きています」、「不確かさは神経に堪えます¹⁸」といった表現が、その苦痛を端的に表現している。そうした状況の中では、物事を俯瞰的に見て全体を見渡すという思考がますます困難になり、主体が進むべき方向性が見失われることになる。

こうした「空虚」で宙ぶらりんな状態は、何らかの感情的な埋め合わせを必要とするものであった。特に家族という、守らなければならない「重要な他者 *significant others*」¹⁹の苦境は、遠く離れた前線においてどうすることもできずに傍観せざるを得ないという無力感をかき立てるものであったがゆえに、直接の暴力経験以上に、こうした埋め合わせを必要とした。そこで、それを補償するためにしばしば利用されたのが、激しい敵愾心であった。手元にある言葉のパレット、すなわちディスクールの中からアドホックな形で「敵イメージ」が選ばれることになる。英米軍に対しては「ギャングたち *Gangster*」「ヤンキー」、あるいは彼らに対する「報復」といったプロパガンダ用語がそのまま援用され、ロシア軍に対しては「洪水」のように襲いかかってくるボルシェヴィキ、ロシア人への恐怖・蔑視、あるいはその野蛮さなど、プロパガンダによって喧伝された言説ばかりがほとぼり出る。

このように、敵が具体的に措定されることで危機的な現状の原因が説明され、無力感に一種の「合理性」が付与される。すなわち、自分や家族の無力感を作り出しているのはこの「敵」であるということが明確になれば、自分が無力であるという

この原因も「理解」できるだけでなく、その無力感に疚しさを感じる必要もなくなるのである。「状況が許す以上にあれこれと考えをめぐらせても、今はもはや意味がありません。我々が元気で無事に再会したいのなら、我々のすべての注目は、一番身近にあることへと向けなければいけません。つまりそれは我々の敵です」²⁰という記述が端的に示すように、「敵」がはっきりすることで、暴力によって麻痺しかけた自らの方向性を再び明確なものとなり、無力感が少なくとも一時的には緩和される²¹。さらに、パルチザンによる攻撃の場合には、恐怖感を振り払い、現地におけるコントロールを回復するために「断固とした処置」、つまり射殺や家屋・財産への放火が行わなければならないとされ、そうした報復行為が次の記述が示すように、ボルシェヴィズムの脅威や、イタリア兵への蔑視、セルビア人の歴史的な残虐性などによって正当化されることになる。

「このような卑劣な手段によってここ [イタリア] では戦いが行われており、これからも断固とした処置を執るのみです。さもなければ我々は地域を支配することができず、ボルシェヴィズムに非常に近い立場の体制が権力を握ることになるでしょう。イタリア人も勿論、非常に不安を抱えています。法的には彼らがこの地の支配者なのですが、現実には違っています。もし我々がここにいなかったなら、状況はさらにひどいものとなり、この口先だけの兵士たちSalonsoldatenたちがここをふんぞりかえって歩き回ることすらできなくなっていたことでしょう」²²。

「ここ [セルビア] の人間やその性格については、あなたも十分歴史から学んでいる通りです。彼らは人を殺そうという欲望を抑えることができませんし、激情に満ちた報復への衝動も抑えられないのです。ここでは常に戦闘があり、山岳はこの匪賊たちに隠れ家を提供していて、我々の戦いを困難にしています。常に変化があり、ある橋が吹き飛んだかと思うと、こんどは列車が撃たれたりします。しかし、報復は即座に行われます」²³。

このように暴力経験は、危機に瀕している「我々」を、それを脅かしている「彼ら」との対比の中で強く意識させ、さらに強い「我々」意識を醸成するものでもあった。そうした「我々と彼ら」の対比や敵愾心は、主体的な思索に基づくというよりは、情緒的・感覚的な反応であり、そもそも暴力がもたらす無力感や感覚の麻痺はそうした思索を困難にするものでもあるが、しかし他方でそうした「我々」と「彼ら」という対比は、すでに兵士が軍隊に入る前に「社会知」として内面化していたステレオタイプに基づくものでもあった。

こうして問題は第三点の(3) 敵・味方イメージへと移る。大戦末期に兵士たちをなおも戦闘へと駆り立てた要素は、何よりもまずロシア軍の「洪水」への恐怖感や、故郷の家族へと襲いかかる英米軍への敵愾心であった。ロシア軍は女性に襲いかかり(「私が悲しく思うのは、この賤民Pöbelの犠牲になった人々、特に女性や少女たちのことだけです」)、「ボルシェヴィキどもは凄まじい乱暴を働き、殺戮し、略奪しています(私はある家族から残酷な話を聞きました。彼らはロシア軍に占領さ

れた故郷の地から、我々の前線へと逃れてきたのです)」²⁴、男性をシベリア送りにする恐ろしい存在であり(「千人単位で男たちはロシア(シベリア)へと送り込まれています」、「彼らはそれ[シベリア送り]をドイツ人に対してもやろうとしていて、我々が故郷を再び目にすることができないようにしようとしているのです)」²⁵、降伏して捕虜になるなど問題外であって、戦い続ける以外の選択肢などないと、ほとんどの兵士が考えていた(「我々は戦争に敗れてはいけなし、実際敗れることはないのでしょ。我々はボルシェヴィズムの奴隷になりたくはありませんし、それならむしろ首をつった方がましです」、「ロシア人は、いかなる状況であっても再び駆逐されねばなりません。私が全ての出来事にうんざりしているといえども(好きで兵士になったわけではありません、あなたも知っての通りです)、この戦いを継続することが必要だということは私も認識しています[傍線原文]」)²⁶。また、空襲のたびに激しい怒りが呼び覚まされ、「報復」に際しては嗜虐的な喜びも伴う英米軍への敵愾心は、次の手紙が示すように、その強度において決して無害なものではなかった。

「V1ロケットを見るたびに、イギリスに与えられる破壊への喜びを覚えます。私は通常そんなに悪い人間ではありません。しかしトミー[イギリス兵]には最悪の事態が起こることだけを願っています」²⁷。

「この犯罪者たちに悪行をやめさせ、復讐する 때가 いずれやってくればいいのですが！」²⁸。

「この忌々しい連合国には、利子を付けて、利子の利子を付けてお返しをしなくてはなりません」²⁹。

「ドイツでなしたことに対して、この犯罪者たちに報復が行われるまで、それほど長くはかからないでしょう。新しい秘密兵器を使うまでもないかもしれません」³⁰。

そしてここで重要なのは、そうした敵愾心や敵イメージが、常に「ドイツ人とはどのような存在であるか/あるべきか」という自己イメージと裏表になっていた、という点である。次の文章に見られるように、アメリカやイギリスは物質主義的で表層的であるという敵イメージは、精神的・文化的なものとしてのドイツ人の自己イメージの「ネガ」としても一定程度機能していた。

「ゲルマン世界は、機械人間 *Maschinenmenschen* およびアメリカニズムに対する戦いを行っている」と主張しています。しかし最終的に我々はこの根源悪ゆえに、我々自身の魂の喪失と硬直ゆえに破滅するのではないでしょう。

我々もまたあらゆる外面的、技術的、衛生的な進化の長所をうまく飼い慣らし、処理することができますし、それは素晴らしいことですが、民族に維持や発展をもたらすような深みや魂をもたらすわけではありません。ある民族の創造的な力、魂、精神が浅薄なものとなり、民族が内なる可能性を発展させることができず、人間が自分の個性を実現することができないならば、その民族やその人間は落ち目となります。文明の繊細さの中で快適に生きていくことはできるかもしれませんが、自己を発展させることなく、自らの文化を蔑ろにすれば、退化していくほかありません」³¹。

また、荒廃していて無秩序、不潔で文化水準が低いというロシア・東欧、あるいはイタリアに対するイメージは、清潔さや秩序・義務観念といった「ドイツらしさ」のコインの裏側でもあった。イタリア人についてのある兵士の記述は、ドイツ人としてのアイデンティティがポジとして、ネガである「他者」と裏表になっている構造を端的に示している。

「今まで我々が考えていたほど優れた民族ではありません。ドイツ国防軍、我々の確固、断固とした態度、あらゆることにおける清潔さ、正確さに彼らは驚嘆しています。彼らの中には、我々のようでない兵士がいることを残念がり、ドイツ民族をあらゆる点における模範と見なし、ドイツというお手本に見習って刷新を図ろうとするものも多くいます。しかし大多数は戦争のことについて無知であり、時代とは無関係に生活しています。特に若者は昼間から暇をもてあましてぶらぶらしており、居酒屋で散財するありさまです」³²。

確かに少なくない兵士たちは、現地の人々の親切さに触れて感激し、戦争の中で苦しむ彼らに同情を寄せ、初めて目にする生の異文化に純粋な興味を抱いていた。しかしそうした個人々人に対する同情や共感と、彼らに対する総体としての蔑視の眼差しとは決して矛盾するものではなかった。現地住民との接触によってそうした認識枠組み自体が変更されることはほとんどなく、たとえ肯定的な事例に出会ったとしても、「[宿営の]女主人は非常に清潔さに気を遣っており、娘たちも甲斐甲斐しく手伝っています。この家はその点においていつものイタリアとは全く違います。男はうろつきまわったりせず、一日中外で働いています」³³などと、あくまで例外的なもののみなされた。さらに、人々との交流を通じてそれまでの「社会知」が確認されたときみなす兵士もおり、そうした場合には先入観や蔑視がさらに強化されることになる。こうした意識が、占領地からの微発や略奪、あるいはパルチザン掃討の際にそれを下支えする役割を果たしたと言える。

G・フレドリクソンは人種主義の本質を、「ひとつのエスニック集団や歴史的な集団が別な集団を、差異が遺伝的で変えられないと信じられていることを根拠にして排除し、殲滅しようとする」こととして定義している。つまり、「特徴的な性質が生来的かつ不変であるという信念の存在と表明」という観念の次元と、そして「権力の行使を通じて、差異を不平等で不利なもの」とし、排除・殲滅するという実践の次元の両方を共有しているのが人種主義、ということになる³⁴。後者の実践という次元、言い換えれば「機能」の面においては、本報告で見てきた敵イメージは何ら遜色がない。徹底的な抗戦、即座の報復、支配の正当化という行動を喚起するうえで、これらの敵イメージは十分な意味づけを提供したからである。しかしそうした意味づけが、「特徴的な性質が生来的かつ不変」であるという信念であったかどうかは、判断が難しい。文化や歴史、民族性などにそうした性質を還元する本質主義的な記述も散見されるし、性質が社会的諸条件によって変化しようと兵士たちが認識していた証拠も見あたらない。ただ、それが人種という範疇で正当化されたり、生物学

的や遺伝の観点から語られたり、「支配人種」「下等人間」といった言説が登場することは滅多にない。むしろそこで見られるのは、スラヴ人に対する文化、生活水準における絶対的な優越感という、伝統的な蔑視や偏見、ステレオタイプである。もちろん、家族や恋人など「重要な他者」とのコミュニケーションである野戦郵便は、体系的・組織的に敵イメージについて述べる媒体として必ずしも適切ではないし、手紙にこうした言説が書かれないことをもって直ちに、彼らと人種主義的な観念が無縁であったと考えることは出来ない。しかしそれでも、そうした人種主義的な正当化を経ずとも伝統的な蔑視やステレオタイプには、さらなる戦争の継続、急進化という行動を導き出すのに十分な意味づけが可能であったということは、重要である。むしろそうした伝統的な観念であったからこそ兵士たちにとっても大きな親和性があり、「機能」としては事実上人種主義と何ら遜色ない破壊力をもたらし得たと考えることができよう。

一方、大戦末期の絶望的な戦況の中で兵士たちが抱いていたドイツ・イメージは、純粹無垢な「可哀想なドイツ」というものであった。優れた文化や精神性を有し、「正しい」理想をもった、素晴らしい何か。ある兵士はラジオで耳にしたヨハン・シュトラウス二世の「皇帝円舞曲」に「ドイツ民族の高度な文化」を見て取り、「地球上のどの民族にこのような音楽がつくれるのでしょうか?」、「彼ら[敵]は、我々の文化的貢献なしに生きていくことが絶対にできないのです。我々自身にもそれ[ドイツ文化]は決戦に勝利する勇氣と力をくれます」³⁵と記して、文化においてドイツ民族が他を圧倒しているという優越感と、それがもつモチベーションとしての力を明らかにしている。そうであるが故に、逆に敗北した場合には文化もろとも「ドイツ性」を喪失することになるのではないかという、恐怖心を抱く兵士もいた。

「我々みながすでに考えているのは、[敗戦した場合の]ネガティブなことがどれだけ恐ろしいものとなるか、ということです。私が言いたいのは、あらゆるドイツ性 *Deutschheit*、ドイツの文化、そしてその他多くのものを失うということです。ベートーヴェンやモーツァルト、ロルツィングを一体どこで我々は直接耳にすることができるのでしょうか。詩人や思想への理解をどこで学ぶことができるのでしょうか」³⁶。

その上で、「我々が何か罪でも犯したのでしょうか」、「誠実であり、全く無実な民族」、「自らの帝国Reichの自由と安寧のために戦った以外、何も罪を犯していない無実な人々」³⁷というように、純粹無垢な存在として「我々」が表象される。さらに、以下の記述に端的に表れているように、「ドイツ民族」は歴史を超越した存在としても認識される。

「あなた方[家族]は晩年にあつて自分たちが育ち、全人生を過ごしてきた世界が崩壊し、破滅していく様を目の当たりにしているのです。しかもこれは単に十年間の体制が崩壊しているというのではなくて、歴史的に成長してきたドイツという有機体Organismusが、従来形としては終焉を迎えるということなのです。歴史的、

国民的な自覚を持ったドイツ人がこのようなことを認識しなければいけないというのは、つらいものです³⁸。

こうした素晴らしい超越的な「ドイツ」が、にもかかわらず「不当に」痛めつけられているという集合的表象は、運命共同体として兵士たちが自分の境遇を重ね合わせる上で格好の同一化対象であった。そして、「文化国民Kulturnation」「文化民族Kulturvolk」としての自己定義は、「外国と比べると、ドイツの農民の家はいかにきれいなことでしょう。外国で最良の小屋よりも、我々の家畜小屋の方が大抵きれいなのです³⁹」という記述にも現れているように、「他者」への蔑視によっても裏打ちされていた。しかもそうした「他者」は、「何も罪を犯していない」ドイツ人の思いを理解しようとせず、不当に苦しみを与えているのだという強い被害者意識を、兵士たちは抱いていた。

「我々は人生にそれほど多くのものを望んでいるわけではありません。仕事、そして子供たちにとっては喜ばしい目標、それに少々の日々のパン、子供たちが欠乏から自由であること、そして我々がドイツ人であるということ的自由に口をすることができること。それを子供や孫へと遺産として残していくこと。しかしこの数少ないことがらですら、他の人々は我々に恵もうとはしないし、我々を傲慢にも裁こうとしているのです。今東方からのステップが荒れ狂っています。彼らは我々に屈することなく打ち倒そうとしています。ドイツが生きれば、我々の子どももそれを受け継いでいくでしょう。ドイツが死ねば、我々も死ぬのです⁴⁰。

もちろんそこには、無事に生き残るためには集団でまとまって戦い続けるしかないという諦念もそこにはあり、戦い続ける意思をすべてこうした敵・味方イメージに帰することはできない。それでも、彼らが抱いていた不安感や自己憐憫が、「ドイツ」や「ドイツ民族」を彼らの中で現実以上に輝かしく、超越的な存在に見せたとと言えるであろうし、運命共同体、一蓮托生の存在としての「ドイツ」という集合的表象によってもたらされた戦争継続へのエネルギーは、絶望的な戦況の中なおも戦い続ける兵士たちにとってきわめて重要であった。その意味で、たとえ人種主義的な言説がさほど見られない「文化国民」「文化民族」という、基本的に伝統的なドイツ人イメージ、自己定義であったとしても、戦闘を継続させるモチベーションとしては十分なエネルギーを供給しうるものであった。

以上述べてきたことを「市民社会と暴力」というテーマに即してまとめなおすとすると、本報告から見えてくるものは暴力自体が有するダイナミクス、そして市民社会と暴力との連続性という、一見相矛盾する二つの要素である。暴力には、主体の神経に過大な負担を強いることで、感覚を麻痺させ、思考を停止させ、進むべき方向性を見失わせる固有のダイナミクスがあり、このダイナミクスは、歴史主体からある程度自律した構造を有していた。そうした構造自体が敵と味方という二項対立をより鮮明なものとし、歴史主体に方向付けを与え、戦時暴力をさらに急進化させていく。しかしこうした二項対立は、戦場という真空地帯で生まれた非歴史的な

ものでは決してない。それは、「彼ら」に対する伝統的な蔑視や偏見、ステレオタイプ、そして「文化民族」「文化国民」という伝統的な「我々」認識が「社会知」として定着していたからこそ可能となったのである。これは確かに、攻撃的な男性性や人種主義的な自己・味方イメージといった、ナチ・イデオロギーの中核をなす要素とは縁遠いものではあったが、しかしそれはその機能において、ナチ・イデオロギーに何ら劣るものではなく、むしろ深く内面化されているからこそ強いエネルギーを有し、暴力とも容易に接合されうるものであったと言える。

¹ 小野寺拓也『イデオロギーと「主体性」—第二次大戦末期のドイツ国防軍兵士』(東京大学大学院人文社会系研究科、2010年、博人社792号)。以下史料として利用する野戦郵便は、ベルリン・コミュニケーション博物館(BFA)、ベルリン州立図書館(STABI)、ベルリン芸術アカデミー内ヴァルター・ケンポウスキ・アルヒーフ(WKA)の各所蔵史料、シュトゥットガルト現代史図書館所蔵のシュテルツ・コレクションのトランスクリプト(抜粋)(Sterz)、およびハインリヒ・ベルの野戦郵便集などの各公刊史料である。

² 参照、ピーター・バーガー、トーマス・ルックマン、山口節郎訳『現実の社会的構成：知識社会学論考』新陽社、2003年。

³ WKA-3032/1, 1944.4.10.

⁴ WKA-3032/1, 1944.10.2.

⁵ Sterz, 1944.10.21, 伍長 L.

⁶ STABI-NL161, 1943.4.2.

⁷ Waller, James, *Becoming Evil. How Ordinary People Commit Genocide and Mass Killing*, New York, 2002, pp.111ff.

⁸ STABI-NL161, 1945.3.16.

⁹ BFA-3.2002.0822, 1943.3.28, 1944.2.29.

¹⁰ BFA-3.2002.0822, 1944.8.14.

¹¹ BFA-3.2002.0255, 1945.4.10.

¹² STABI-NL161, 1944.6.7.

¹³ BFA-3.2002.7115, 1945.2.14.

¹⁴ Sterz, 1944.10.10, 上等兵 H.W.

¹⁵ 1944.6.10, in: Böll, Heinrich, *Briefe aus dem Krieg 1939-1945*, 2.Bd., Köln, 2001, S.1062-3.

¹⁶ 1944.10.10, in: Böll, Ebd., S.1115.

¹⁷ BFA-3.2002.0894, 1944.10.8.

¹⁸ WKA-3032/1, 1945.1.10, 1945.2.26.

¹⁹ 参照、多賀太『男性のジェンダー形成—く男らしさ>の揺らぎのなかで』東洋館出版社、2001年、61-3頁。

²⁰ BFA-3.2002.7133, 1945.2.19, 1945.2.22.

²¹ 同様の指摘として、サミュエル・ウェーバー、野内聡訳『破壊と拡散』月曜社、2005年、110頁。

²² BFA-3.2002.0264, 1944.4.9.

²³ Sterz, 1944.9.2, 伍長 H.B.

²⁴ Sterz, 1945.1.3, 上等兵 A.T.; 1945.2.10, 伍長 W.B.

²⁵ Sterz, 1944.9.10, 一等兵 B.A.; 1944.10.1, 伍長 H.Z.

²⁶ Sterz, 1944.9.27, 本部付き伍長 B.S.; 1945.2.10, 伍長 W.B.

²⁷ 1944.11.18, 上等兵 P.-D. N., in: Echternkamp, Jörg (Hg.), *Kriegsschauplatz Deutschland 1945. Leben in Angst – Hoffnung auf Frieden. Feldpost aus der Heimat und von der Front*, Paderborn, 2006, S.114-5.

²⁸ BFA-3.2002.7257, 1944.5.30.

-
- ²⁹ BFA-3.2002.0884, 1944.6.24.
³⁰ Sterz, 1944.9.24, 上等兵 W.K.
³¹ Sterz, 1945.1.11, 伍長 H.H.
³² BFA-3.2002.0264, 1944.2.16.
³³ BFA-3.2002.0264, 1945.2.28.
³⁴ ジョージ・フレドリクソン、李孝徳訳『人種主義の歴史』みすず書房、2009年、176頁。
³⁵ BFA-3.2002.0264, 1944.8.20.
³⁶ Sterz, 1944.11.3, 伍長 W.B.
³⁷ BFA-3.2002.7243, 1944.10.29; BFA-3.2002.0264, 1945.3.4; Sterz, 1945.3.3, 伍長 G.S.
³⁸ Sterz, 1944.10.13, 伍長 H.V.
³⁹ Sterz, 1945.2.24, 上等兵 H.R.
⁴⁰ BFA-3.2002.1354, 1945.2.11.

„Soziales Wissen“ und Gewalterfahrung: Feldpostbriefe von Wehrmachtsoldaten in der Endphase des Zweiten Weltkrieges

Takuya Onodera

Im vergangenen Jahr habe ich meine Dissertation „Ideologie und „Agency“: Feldpostbriefe von Wehrmachtsoldaten in der Endphase des Zweiten Weltkrieges“ eingereicht. In meiner Dissertation habe ich mehr als 5000 Feldpostbriefe von Wehrmachtsoldaten dahingehend studiert und analysiert, welche Elemente Wehrmachtsoldaten dazu motiviert haben, trotz des hoffnungslosen Verlaufs des Krieges bis zum Kriegsende weiterzukämpfen, oder mindestens durchzuhalten. Dieses Referat ist die Zusammenfassung meiner Dissertation. Die drei Schwerpunkte meines Referats sind wie folgt: 1. Männlichkeit als „Härte“, 2. Die „Eigendynamik“ der Gewalterfahrung, 3. Die Vorstellung von „Wir“ und „Gegner“.

1. „Ganz normale Soldaten“ mußten die Maske der „Härte“ gezwungenerweise tragen, um die eigene Identität als Zivilbevölkerung nicht zu beschädigen. Ihr persönlicher Hintergrund als Zivilbevölkerung war viel wichtiger für sie. In diesem Sinne kann man sagen, dass diese „Härte“ im Grunde defensiv war. Diese „Härte“ war nicht so aggressiv und kämpferisch, wie es die Nazi-Ideologie von ihnen verlangte, sondern stark verbunden mit „zivilen“ Wertvorstellungen, wie „Prüfung“ oder „Passion“. Aber das waren für sie altvertraute Vorstellungen, nämlich „Soziales Wissen“, das schon lange vor dem Militärdienst von ihnen verinnerlicht worden war. Deswegen wurzelte dieses Wissen tief in ihnen, und funktionierte als Motivation zum problemlosen Weiterkämpfen.

2. Soldaten haben nicht nur an der Front unter Kriegsgewalt gelitten. Zum Beispiel die Sorge um die eigene Familie an der Heimatfront, die auch unter dem Luftkrieg litt, und die Ohnmächtigkeit, die eigene Familie nicht selbst schützen zu können, haben die Soldaten stark belastet. Solche direkten und indirekten Gewalterfahrungen bedeuteten eine starke Belastung für die Soldaten, die ihre

Nerven lähmte und ihr Denken stoppte. Ferner war es sehr schwer für die Soldaten, die eigenen Gewalterfahrungen in klarer Sprache auszudrücken, weil Gewalt dem historischen Subjekt gelassenen Überlegung oder Eigenständigkeit beraubt. Dieser Zustand der Orientierungslosigkeit war unerträglich für die Soldaten, weil es ihr Ohnmachtsgefühl noch verstärkte. Aber es gab eine Möglichkeit, sich dieser Ohnmächtigkeit zu entziehen: den „Gegner“ zu benennen, dadurch den Grund für diese Ohnmächtigkeit „rational“ zu erzählen, und eine klare Orientierung wiederzuerlangen.

3. Die Furcht vor den Russen und die Feindseligkeit gegenüber den Luftangriffen der Alliierten waren wichtige Motivationen zum Weiterkämpfen. Meistens haben solche Gegner-Vorstellungen die negative Seite von positiven „Wir-Deutschen“-Vorstellungen ausgemacht. Deutsche seien sauber, pflichtbewusst, diszipliniert, die Italiener dagegen z. B. schmutzig, faul, immer trinkend usw. Ferner haben die Soldaten geglaubt, Deutsche hätten eine hervorragende Kultur und Geistigkeit, und kämpften für eine „gerechten Sache“, sie seien ehrlich und trügen keine Verantwortung für Krieg und Verbrechen, und Deutschheit hätte einen transzendentalen Wert. Trotzdem verstünden die Gegner die wirkliche Absicht der Deutschen gar nicht, und sie versuchten überheblich, über die Deutschen ein Urteil zu fällen, so glaubten die Soldaten. Solche Selbstviktimisierungen von Deutschen und Selbstmitleid („armes Deutschland“) haben eine sehr große Rolle gespielt beim Weiterkämpfen der Soldaten.